

失望を拍車として（新しき世界へ 1972 年 7・8 月号）

1

私は失望した。

五年ブリで、大きな希望をもって、五百万円もかけて帰って来た日本で、私は深刻な悲痛な失望にガンと頭をうちつけた。

ソレは私の人生観をグラつかせるほどのモノだった。ソノダケニ私は大きな発見もした。しかし何といっても悲しいコトだ。

人はミナ食うために生きている。つまり渡世人ばかりである。大学教授から、商人、百姓、職工、ことにアワレナのはサラリーマンである。つまり人は少しばかりの金を得るために、黄金の不渡手形である銀行券を何枚か得るために、日毎はたらいている。つまり唯物主義者である。営利本位、金モーケ専門である。しかも一生かかって何程のこるか?百万か、二百万くらいのモノだろう。

こんな悲しい国が他にあるだろうか?

何という悲しい国だ!

何という哀れな動物だ!

ここに一つの生活統計(産経)がある—

これで見ると収入 4 万 1 千円で、16,600 が食費。正に 40%以上である。一家 4 人で家と光熱費に 7,700 円出している。交通費が一文も出ていないのはドーというワケか。貯金が 1,200 円あるが、一人病気すればタチマチふっとんでしまう。こんな生計は不安ソノモノであり、100%食うための生活である。

	原案	修正(八月)
収 入	41,000	41,000
貯 蓄	1,200	4,250
支 出	39,800	36,750
食 費	16,600	16,000
住・光熱費	7,700	7,700
被 服 費	500	500
保健・衛生費	1,000	700
教 育 費	1,500	1,500
教養・娯楽費	2,000	700
交 際 費	1,000	0
借金返済金	4,000	4,000
主人こづかい	3,000	2,500
主婦こづかい	2,500	1,500

	高校生 1 同	350
追	同上 2 同	300
加	予備費	1,000

(これを PU 真生活に切りかえると、まず食費を最低にして 12,000 ういてくる。衛生費千円、小づかい等キリつめて、しめて 15,000 うく、1 万 5 千円昇給したと思えば、何でも出来る。それを 10 年か 20 年やりながらミッチリ勉強すれば相当なモノになり、アワヨクバ自由人にもなれる。

2

私は 65 年あそびつづけてくらししてきた。私は金のために働いたコトがない。私は一生自分のユメと詩を追う情熱をもちつづけて来た。今もソレをつづけている。先日京都で 50 年以上の幼なじみがメズラシク集って歓迎会をしてくれたとき、私はミナと私のヒラキの大きさをハッキリ見た。友だちはミナ常務だの社長だの教授だの、元大臣だのいう名刺をくれた。ミナもう人生の峠をのぼりつめた人ばかりだった。イヤもう下りかけている人、クダリ坂もモー半ば下りてしまった人ばかりだから、私はタマゲタ。私は恐いオクテだ！

私の人生の第一幕は今上ったばかりである。コレからが私の舞台である。65 年のオソアキ登場！ナントいうアキレタ奴だ。しかし「表大なればウラも大なり」の原則で、私という木は 65 年の地底生活から芽を出したのだから、少くともその 5 倍か 10 倍—325 年か 650 年楽しまなくちゃならない。イヤ実はその千倍、6 万 5 千年ぐらいあばれたいモノである。

3

昨年 K 青年とその妻 J が三人の男の子をつれて来た。私の帰ったのがオソかったので長男は長イスの上で、三男は母の背でねていたが、三才半の二男はおきていた。三人とも男の子であるのはその食生活が質素であることと母が父より健康であることを示すから、そして一度も病気をしないというからヤレヤレと安心したが、相当甘いモノも入っている。

K は三年前から独立して洗濯屋をやっている。月 10 万円くらいの仕事を 40 軒のお得意でやっている。過去のサラリーマンの奴隷根性をシミジミ思い出している。「マアやっと食っていけるようになりました」という結論。「君もヤッパリ食うために生きている人間か！食ったり、子をヒリ出したりすることなら犬だって鼠だって、シラミだってやっている。しかもカレらはアソブために生きているんだ。

一体何をこの 5 年間に勉強したのか？フランス語は？英語は？ドイツ語は？……一体何百冊本をよんだか？私は MI で毎月 50 冊以上よんで話してあげたネ、みんなに…」

K もミナのように、PU や正食という『アラジンのランプ』『天国のカギ』をもらいながら、ソレを使って楽しい楽しい一生をくらすというアソビをやらなかった一人である。

商売で成功するというコトは、モーPU アソビを忘れたコトだ。課長や局長や教授になる

の、学位をとるのというコトは渡世人の烙印をおされるコトだ。そんなモノになったら、ソレこそ本格的なアノビに大速力で帰るべきである。

何という悲しい人々の国だ!

KとJは3年梅干と3千円をお土産にもって来た。『天国のカギ』のお礼は3千万円出しても3千億円出してもできない。貧者の一燈は実はドレイのアカシである。『天国のカギ』のお礼は、思う存分、スキナことをやって、やってやりぬく姿を見せるコトである。(モチロン「スキナ事」が3千円でなく、スバラシイ無上の宝を万人にバラマクことであればいいが)。しかし始めて、または久しぶりで、年長者を訪ねるのに花一つもって来ないようなケチン坊がある。これは西洋文明というジャングルの蛮民たちでさえ絶対にやらないコトだ。日本人は古来、贈物をしすぎる、といわれたモノだが、モーそんな日本人は少なくなったらしい。

4

このへんで結論を出そうー

日本人は勤勉である。奴隷である。人生の目的が低すぎる。自由か然らずんば死!というコトバが分らない。自由こそ生命であるというコトが分らないらしい。

所詮、判断力の発生等の示す通り人間の99%9999が第一乃至第四までの段階に属しているモノらしい。日本全体で第五以上は80人か90人くらいしかいないらしい。

現在の教育というモノを全廃したら、第五以上の人間は少くとも8千人くらいになるだろう。そーすると、この国はモットモット幸せな国になる。昔風な教育をやれば少くとも百万人くらいになるだろう。そして8千5百万人くらいは少くとも肉体の健康だけは獲得するだろう。全日本にPUと正食を稽古する人が千人できたら、日本は方向をかえるだろう。1万人できたら、もうリッパナ「健康と幸福の国」(不老長寿の国だ。私たちの仕事は大へん六カシイモノだ。(今は医療統計によると9千万人中肉体だけの健康人が0.1%以下だろう。身心健康全自由人は0.0001%以下だろう。))

ここでフツーの人なら絶望するところだが、幸い『表大なればウラまた大なり』の原則があるので、私はこの大きな絶望的な困難を拍車として前進をつづけることができる。つまり永遠の幸せを身につけるというコトは99%9999の日本人のやっていないようなアソビすなわち生活をやるというコトなんだ!!!ナントいう馬鹿なボロイことだ!!!

この大きな絶望より大きな幸福への拍車は他にあるまい。9千万の絶望人に心からなる感謝を!

(1958.8.31 東京光る雲の家にて)